

空き家活用 定住後押し

木曾地域にアーティストが、人を招き入れる。

トが滞在しながら作品を制作・発表する芸術祭「木曾ペインティングス」。平成29(2017)年に始まり、今秋で5回目を数える。古民家を会場とすることで古い街並みに新しい風を吹かせている。

滞在作家は空き家の掃除から始め、閉ざされていた家々の戸や窓を開

未来をひらく

き、人を招き入れる。「一人一人が空き家に入って手を加え『住めるじゃないか』と気が付く」。発起人で画家の岩熊力也さん(51)は、アーティストは美術館で見ただけのものではなく、生活の局面や考え方を考えるきっかけになるものだと考える。街道筋を見渡せば空き家が目につくが「荒廃した印象を伴う過疎を感じたことはない」。芸術祭の準備にも参加してくれる多くの子供たちがいるからだ。「文化があり、住民が生き生きとしている」と、適度に「疎」がある「適疎」の価値に目を

⑩ “適疎”の価値 注目しよう

を向ける。芸術祭をきっかけに3人の作家が木祖村に移住している。

数原宿の空き家の軒先には屋号の看板が掲げられている。芸術祭の運営に携わる大沢理沙さん

(25) 岐阜県羽島市出身が村民と共同制作した。屋号看板は、芸術祭によつて扉が開いた空き家の目印となり、そこに作家が移住した。「古民家の活用に目が向き始めている。うれしい」。空き家は魅力を秘めた地域の財産。決して「過疎の象徴」ではない。

◇ ◆ ◇

テレワークの拠点施設

《第1部》ふるさと×アップデート



芸術祭「木曾ペインティングス」の参加作家と共に元旅館を改装し、滞在施設兼展示ギャラリーとして昨年オープンさせた「藤屋レジデンス」(木祖村数原)の前で笑顔を見せる岩熊さん(右)と大沢さん

として木曾町が福島に整備した「ふらっと木曾」が今春3周年を迎えた。利用を検討する移住者には「おためし木曾」と銘打ち、町巡りなどの滞在プランをコーディネートする。「毎日の買い物は

「どうする?」「病院はあるの?」といった疑問にも丁寧に答える。運営を担う「木曾マナビネットワーク」の坂下佳奈さん(30)は「チャレンジをサポートする場でありたい」と意欲を示す。新たな出会いを願う「もてなしの心」は、過疎の現実を受け入れた先にある。

◇ ◆ ◇

5月下旬、木祖村小木曾の空き家の車庫に絵画が並んだ。昨春から村内に定住する芸術祭の参加作家がアトリエを公開した。家主がかつて使ったまま保管されていた古い生活道具も並ぶ会場に足を運んだ唐澤一寛村長は「過去と現在の共存」と感心しつつ「作家を受け入れることに慣れなげやいけなないね」。適度に磨きをかける鍵は住民の手の中にある。(向山均)

みんなの一言

・子供たちに今の自然を残していけるのか不安。田んぼや畑がどんどん住宅地になってしまう。これでいいのか。

(松本市水汲、自営業女性、39歳)

・家の周りに空き家がある。単身の高齢世帯も多い。(塩尻市大門七番町、介護福祉士女性、59歳)
※市民タイムスのHPなどのアンケートより

